

# 2020年度(第16回) こども環境学会賞の発表

2020年6月より公募致しましたこども環境学会の学会賞につきましては、2020年10月末までに論文・著作賞12件、デザイン賞10件、活動賞4件、自治体施策賞1件、合計27件のご応募をいただきました。

選考委員による厳正な審査の結果、論文・著作賞該当なし、論文・著作奨励賞2件、デザイン賞1件、デザイン奨励賞2件、活動賞1件、活動奨励賞該当なし、自治体施策賞該当なし、自治体施策奨励賞1件、以上合計7件が選定されました。受賞者は以下の通りです。(順不同、敬称略)

顕彰委員会委員長	高木 真人
論文・著作賞選考委員長	高橋 勝
デザイン賞選考委員長	竹原 義二
活動賞選考委員長	神谷 明宏
自治体施策賞選考委員長	田川 正毅

## こども環境 論文・著作奨励賞

### 論文・著作奨励賞

佐藤将之(早稲田大学)

心を育てる保育環境——思いと環境をつなぐ保育の空間デザイン

### 論文・著作奨励賞

藤後悦子(東京未来大学)、井梅由美子(東京未来大学)、大橋 恵(東京未来大学)

スポーツで生き生き子育て&親育ち  
—子どもの豊かな未来をつくる親子関係

## こども環境 デザイン賞

### デザイン賞

三浦康暢(学校法人景盛学園 宮ノ丘幼稚園)、  
高野史彰(高野ランドスケーププランニング株式会社)、  
岩田未来(株式会社象設計集団)

宮ノ丘幼稚園(札幌)

### デザイン奨励賞

山田伸彦(株式会社山田伸彦建築設計事務所)  
東 環境・建築研究所

encollege ENCAFF むすび堂 学童カフェ駄菓子屋

### デザイン奨励賞

藤木隆男(株式会社藤木隆男建築研究所)  
児童養護施設『マリア園』

## こども環境 活動賞

### 活動賞

西本雅人(福井大学)、久保久志(株式会社東畑建築事務所)、  
江端雄也(株式会社鈴木一級建築士事務所)、宇野勇治(愛知産業大学)、  
松木憲司(蒼築舎株式会社)、辻 悟(株式会社工房ヤマセン辻佛壇)、  
辻 亮(株式会社工房ヤマセン辻佛壇)、新川森林組合、魚津市立星の杜小学校、  
魚津市教育委員会、福井大学西本研究室

木造校舎を使った木育カリキュラムの実践  
「魚津市立星の杜小学校での取組み」

## こども環境 自治体施策賞

### 自治体施策奨励賞

日進市長 近藤裕貴

子ども権利条例にもとづく園児向け工事説明会の取り組み  
—愛知県日進市の事例

# 各賞の対象と審査委員

## (1) こども環境論文・著作賞

近年中に完成し雑誌などに公表された研究論文および出版公表された著書・著作であって、こども環境学の進歩に寄与する優れたもの。

### 選考委員

- 委員長 高橋 勝（東京福祉大学大学院教授、横浜国立大学名誉教授・教育哲学）  
（委員） 織田 正昭（国際福祉専門学校／（元）東京家政大学大学院客員教授・医学／国際保健）  
（同） 河原 啓二（社会医療法人財団 聖フランシスコ会顧問・公衆衛生）  
（同） 住田 正樹（九州大学名誉教授／放送大学名誉教授・発達社会学）  
（同） 福岡 孝純（日本女子体育大学招聘教授・スポーツ環境）  
（同） 仙田 満（東京工業大学名誉教授・建築）  
（同） 矢田 努（愛知産業大学名誉教授・建築）  
外部委員 中田 基昭（東京大学名誉教授・教育方法学、幼児教育学）

## (2) こども環境デザイン賞

近年中にデザインされた環境作品（建築・ランドスケープ・インテリア・遊具・家具・グラフィックその他）であり、こども環境学的見地からも高い水準が認められる独創的なもので、こどもの成育に資することが認められるすぐれた環境デザイン。

### 選考委員

- 委員長 竹原 義二（神戸芸術工科大学客員教授・無有建築工房・建築家）  
（委員） 佐久間 治（九州女子大学特任教授・建築学）  
（同） 小池 孝子（東京家政学院大学教授・住居計画学）  
（同） 千代章一郎（島根大学学術研究院教授、建築学）  
（同） 鮫島 良一（鶴見大学短期大学部准教授、同附属幼稚園園長・彫刻家）  
（同） 福岡 孝純（日本女子体育大学招聘教授・スポーツ環境）  
（同） 松本 直司（名古屋工業大学名誉教授・建築学）  
外部委員 手塚 由比（手塚建築研究所・建築デザイン）

## (3) こども環境活動賞

こども環境に寄与する、上記以外の活動（施設運営・行政施策・社会活動・その他）であって、近年中に完成した業績および継続的な活動によってその成果が認められた活動。

### 選考委員

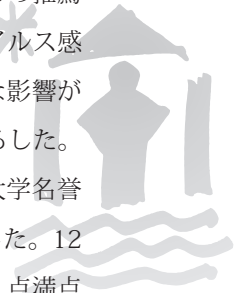
- 委員長 神谷 明宏（聖徳大学児童学科准教授、NPO 法人コミュニティワーク研究実践センター理事）  
（委員） 小澤紀美子（東京学芸大学名誉教授・住環境教育、まちづくり教育）  
（同） 北方 美穂（日本フィンランド協会事業推進委員）  
（同） 新田新一郎（プランニング開代表、NPO 法人みやぎ・せんだい子どもの丘副理事長）  
（同） 齊藤 ゆか（神奈川大学人間科学部人間科学科教授、生涯教育・ボランティア・NPO）  
（同） 西野 博之（NPO 法人たまりば理事長、川崎市子ども夢パーク所長、フリースペースえん代表）  
外部委員 柳下 史織（公益財団法人東京 YWCA 青少年育成事業部統括責任者教育キャンプ、  
外国ルーツ青少年の日本語学習支援、リーダー養成、国際に関すること）

## (4) こども環境自治体施策賞

こども環境に寄与する行政施策であって、近年に完成、完了した施策、若しくは継続中の施策でその成果が認められるもの、又は近年に着手された施策で、顕著な成果が生じ始めていると認められるもの。

### 選考委員

- 委員長 田川 正毅（東海大学教授・建築学）  
（委員） 五十嵐 隆（国立成育医療研究センター理事長・医学）  
（同） 佐久間 治（九州女子大学特任教授・建築学）  
（同） 高木 真人（京都工芸繊維大学准教授・建築学）  
（同） 平野 義文（岩見沢市議会議員）  
（同） 三輪 律江（横浜市立大学学術院教授）  
（同） 松本 直司（名古屋工業大学名誉教授・建築学）  
（同） 河原 啓二（社会医療法人財団 聖フランシスコ会顧問・公衆衛生）  
外部委員 柳田 良造（岐阜女子短期大学名誉教授）



# 総 評

## 子ども環境 論文・著作賞

論文・著作賞  
選考委員長

高橋  
勝

今回の応募は、著作2編、論文10編の合計12編である。ここ数年、会員からの推薦も多く、10編以上の応募が続いていることは有難いことである。新型コロナウイルス感染症の広がりが1年以上も沈静化しない状況が続いている。学会活動にも深刻な影響が及ぶのではないかと懸念もあったが、前年度と同数の応募があり、胸を撫でおろした。

本委員会では、今年度の7名の選考委員に加えて、今回から中田基昭・東京大学名誉教授（教育方法学）に外部審査委員をお願いして、計8名で選考委員会を構成した。12編の著作・論文を、8名の選考委員全員に7～8編ずつ分担当査読してもらい、10点満点で採点した結果とその詳細なコメントを提出して頂いた。さらに、事務局の協力を得て、今回はじめてズームによるオンライン選考委員会を開催し、率直かつ厳正な意見交換を行った。審議の結果、今回は、残念ながら論文著作賞に該当する著作・論文はないと判断し、次いで高い評価を受けた後述の2編を奨励賞に選出した。

今回の応募作品の特徴は次の点にある。著作は2編とも、子どもの心を育てる保育環境づくり、子育てのスポーツ環境づくりというように、子どもが育つ人的、物的な空間づくりの実践的構想とその手だてを論じたものであるのに対して、10編の論文のすべてが、厳密な実地調査方法を駆使して得られた新たな知見を報告するものであった。

例えば、保育所における散歩行動の生理学的評価に関する基礎的研究という論文では、保育所の幼児の散歩という行動が、子どものメラトニン分泌パターン及び生活状況にどのような影響を及ぼすのかが検証されている。また中学生の睡眠習慣と心身の状態の関連に関する研究という論文では、中学生の睡眠習慣が心身の活動にいかなる影響を与えているのかが、詳細に考察されている。いずれも、本学会誌に掲載された論文であるから、厳密な実証の手続きによって考察が深められ、専門家が納得する結論が導き出されている。

学術論文では、合理的手続きによる因果関係の抽出が重要になるから、その手続きによって得られた新たな知見が読み手の今後の行動に影響を与えるようには書かれていない。それは自制されている。手続きの正当性と因果関係の説明能力に読み手の関心が集中する。つまり、研究の手続きにおいても、結論においても、読み手に新たな行動を促したり、感情や価値観に訴えることは極力自制されている。

ところが、博士論文などの学術図書は別にして、広い意味で行政関係者や教育実践者に向けた（学術+実践）著作の場合は、その記述の端々から著者の主張や息づかいが鮮明に伝わってくる。一般向けの記述であるからそれは当然であろうが、専門を異にする者に対しては、その直截なメッセージは共感が得られやすい。今回は、奨励賞に選出された作品は、2編とも著作であった。もちろん両著作とも、論理的説得力が高い内容であるからこそ選出されたわけであるが、同時に、著者の主張や思いも伝わりやすい内容でもある。

結局、非常に限定された問題を冷静に検証する科学論文は、基礎学問の異なる学際的な研究集団においては、評価されにくいのではないかと。今回の選考委員会では、こうした疑問が浮上してきた。著作と論文という微妙に性格がズレるものを、同じ土俵で審査することは無理が生じるのではないかと指摘もなされた。次年度に向けて、その対応策を早急に考えたい。



佐藤将之

## 心を育てる保育環境 — 思いと環境をつなぐ保育の空間デザイン

(小学館、2020年)

本書は、従来の保育だけの観点からの施設や、建築学だけの観点からの保育施設を共に批判して、保育者の「思い」を一つずつ環境につなげていくという新たな視点を強く打ち出して、保育環境を改善していく手だてを具体的に提案したものである。その際に、室内遊びのコーナーでは、単に広だけのスペースではなく、狭くても、子どもの背丈に見合ったスペースや、子どもが落ち着きやすい適度な狭さ、そして適度な暗さも取り入れたドイツやスウェーデンの保育施設の事例が豊富に紹介されている。子どもの心の落ち着きを重視した空間設計が提示されるなど、工夫を凝らした提言が次々と紹介されている。さらに注目すべきことは、保育者自身の居場所づくりの重要性が主張され、会議や学習スペースだけでなく、ゆったりとした休憩室の配置も、スウェーデンの保育園の事例で紹介されていることである。ドイツや北欧の保育施設に学ぶことで、子どもの成育環境を、子どもだけでなく、保育者の心の落ち着きという観点からも捉え直した斬新な提言が示されている。保育現場の実践者ばかりでなく、子ども環境学の研究者にとっても、新たな知見を開示してくれる優れた研究書である。

以上の理由により、選考委員会は、全委員一致して本書を論文著作奨励賞にふさわしいと判断した。(高橋 勝)



藤後悦子・井梅由美子・大橋 恵

## スポーツで生き生き子育て&親育ち — 子どもの豊かな未来をつくる親子関係

(福村出版、2019年)

本書は、序章のタイトルにもあるように、「社会で活躍できる選手を育てる」ために、子どもスポーツに深い関心をもつ3名の女性研究者によって執筆されたものである。そこには、見知らぬ土地で、孤独な子育てを強いられた母親たちが、子どものスポーツ活動を媒介にして、徐々に地域の人々と関わり合い、子育ての輪が広がり、居場所を見つけ出していくプロセスが語られている。本書では、子どもばかりでなく、親たち自身も育てられていくこと（つまり親育ち）が、リアルな体験を通して語られる。幼少期から高校生までのスポーツ活動が、単に子どもの運動能力や社会性を育てるだけでなく、子どものWell-Beingや持続可能な開発目標（SDGs）の視点、子どもの権利条約や生涯発達などの今日課題との関連で詳細に説明されている。単にスポーツ活動のみならず、これからの地域社会づくりや子どもの発達に深く関わる教育的、心理的知見が、著者たちの学問的バックグラウンドに支えられて豊富に紹介されている。本書は、子どものスポーツ活動と地域社会づくりの問題を考える上では、欠かすことのできない著作であると言える。

以上の理由により、選考委員会は、全委員一致して本書を論文著作奨励賞にふさわしいと判断した。(高橋 勝)



# 総 評

## こども環境 デザイン賞

デザイン賞  
選考委員長  
竹原 義二

こども環境学会デザイン賞は子どもの視点に立つ建築、造園、遊具、プロダクト、絵本、グラフィック等さまざまなデザイン領域の総合的な評価により優秀なデザイン作品を表彰するものである。

16回目となる今年度は応募作品が10点あり、8名の選考委員が書類審査により現地審査を行う4作品を選出した。コロナ禍で現地審査の日程がなかなか決定できなかったが、何とか緊急事態宣言前に実施できたことで、書類だけでは見えてこないものごとが確認できた。このような状況の中での現地審査開催にご協力いただいた関係各位に感謝する。現地では作者と園運営者からの説明を受けつつ、作品に関わる子どもたちの生活の様子を見てその作品の評価をした。

最終審査会は緊急事態宣言期間中であったため、選考委員全員出席の中でのリモート開催とした。現地審査を担当した各委員から作品の評価を発表してもらい、リモートではあったが活発な質疑応答を経て充実した討議を重ねることができた。通常の対面審査とは違った審査方法ではあったが各自の視点から審査が進められ、全員一致でデザイン賞一作品、デザイン奨励賞二作品が選考された。現地審査には選ばれたが惜しくも入選に届かなかった「駒岡げんきっず保育園」については次回作品に期待したい。

デザイン賞、奨励賞を獲得なさった作者に敬意を表するとともに、本デザイン賞に応募、推薦をしてくださった皆様に深く感謝する。コロナ禍で子どもの環境にも大きな影響が出ているが、そんな中でも成育に必要な本質を見極めながら新たなデザインへの挑戦を続けていただき、本デザイン賞へも挑戦していただきたい。





三浦康暢 (学校法人景盛学園 宮ノ丘幼稚園)

高野史彰 (高野ランドスケーププランニング株式会社)、岩田未来 (株式会社象設計集団)

## 宮ノ丘幼稚園 (札幌)

宮ノ丘幼稚園に到着すると、馬とポニーたちの円形の馬場が目飛び込む。牧場か?! 馬場の周りにはアプローチ通路が巡り、このアプローチに沿って数棟の園施設が配されている。ここでは、午前は160名御幼稚園児そして40名ほどの幼児保育、午後は120名余りの学童保育。4名の英語教師と、9名のバス運転手。広い園地整備と馬の世話など、園のみんなで行っているという。敷地は2.6ha。草原と森と小川、南斜面となった裏山にスロープあり。小川は湧水の流れて、年中安定した水量。園児たちはその周りで水とたわむれる。長さ幅が30、40メートル程のスロープは、冬にはスキーや橇遊び、夏には子どもたちが走ったり転げ回ったり。ポニーもここに放たれる。自然環境を巧みに利用した、伸び伸び、うきうきとする変化に富んだランドスケープデザイン。建物群は、一見まとまりを欠くが、実は教育・保育内容に沿って機能的に配置されている。それぞれが個性的で、決して型にはまっていない。スロープ面を削り込んで建てられた園舎の屋上には畑があり、くぼんだ土地の園舎は屋上に芝が植えられている。ランドスケープへの配慮と、北国での断熱効果。遊戯室に見られる架構などは、ユニークで興味深い。子ども心をくすぐる設計術が、それぞれの建物のそこかしこに見られる。子どもたちも、こんな遊び心のある建物の中では毎日が楽しいだろう。園児の保護者も時々訪れ、ピクニック感覚で1日過ごすという。素晴らしい立地とランドスケープデザイン、そしてあそび心の伝わる老練な技術による建物群。子どもたちのためのデザインとして、十分に賞に値する。(松本直司)



山田伸彦 (株式会社山田伸彦建築設計事務所)、東 環境・建築研究所

## encollege ENCAFF むすび堂 学童カフェ駄菓子屋

本施設は、埼玉県久喜市に所在する学校法人が、学童保育所の設置にあたり地域の子育て拠点としての役割を目指し、駄菓子屋とカフェを併設して開設したものである。

学童、駄菓子屋、カフェは分棟形式となっており、施設全体の正面には長屋門をイメージした駄菓子屋棟が配置されている。子どもたちは駄菓子屋棟の事務室と駄菓子屋の間から学童棟にアクセスする。複合施設でありながら分棟形式としたことにより、学童棟は子どもの生活に見合ったスケールとなっている。学童棟入口正面では家庭的な雰囲気を演出するキッチンカウンターが子どもたちを出迎え、木製の柱でゆるやかに区切られた室内には地域の伝統を感じさせる畳や障子が配され、落ち着いて過ごせる空間となっている。3つの新築された建物と既存の車庫を改修した倉庫で囲まれた中庭は、体を動かして遊べる安全なスペースであり、オープンな倉庫は雨天時のあそび場となるとともに、集められた廃材で工作を楽しめる場ともなっている。

学童がオフィシャルな子どもの居場所であるのに対し、駄菓子屋はアンオフィシャルな居場所である。保育園やこども園帰りの親子連れから高校生まで幅広い世代の子どもたちが訪れ、カフェ棟との間に設けられた路地空間は駄菓子を介した「たまり」空間として機能している。カフェは親子連れの利用が主であろうという当初の予想を超え、子どもから高齢者まで幅広い世代に利用されており、地域にこの場所の存在を大きくアピールしている。

設計者は法人理事長とともに土地選びからこのプロジェクトに携わったという。地域の子ども環境の向上に寄与し、今後の発展も期待できる本施設は奨励賞にふさわしいものであると評価できる。(小池孝子)

デザイン  
奨励賞

藤木隆男 (株式会社藤木隆男建築研究所)

## 児童養護施設『マリア園』

本施設は長崎市南山手の高台にある見晴らしの良い旧小学校敷地に移転新設された定員46名(内地域小規模6名)の小規模ユニットケア児童養護施設とそれに付設された地域・子育て福祉の核となる児童家庭支援センターである。

敷地は大浦天主堂まで徒歩6分という立地で、市の「伝統的建造物群保存地区B」に属しており、移転前の旧園舎は今後、赤レンガの近代建築を活かしたホテルとして保存再成される予定であり、新設園舎も「坂の町」南山手の場所性を継承した建築物群として計画されている。

マリア園は1948年より児童福祉法による養護施設として認可された組織であり、その前身は100年以上前に整備されたカソリック系の修道院という地域との長い歴史があり、本施設の建設、運営においても市民との関係性が良好であると伺った。

審査対象の建築物は、木造2階建の施設であり、天井が高く教会堂をイメージさせる地域交流室と2階に児童家庭支援センター機能諸室を持つ事務棟と、中庭を介して対峙する児童園舎(児童棟)3棟(5ユニット)により構成された建築物群である。

外観デザインでは、伝統的都市景観との調和を図るため、屋根形状や構法、材料などに多くの工夫配慮がなされていること。内部空間デザインでは、虐待などにより保護者から離れてここで暮らす成育期の子どもたちの安心と安全を確保するために、木造を駆使した非常に質の高い居住空間を提供していること。特に、児童棟では、2階において、独立性を担保した個室を用意すると共に、そこから眺める南山手の異国情緒豊かな長崎らしい伝統的街並みへのビスタが確保されている点や、1階のリビング・ダイニングでは逆に開放的で多様な居場所を持つ空間が計画されており、児童たちが他者との自然な交流を誘発しやすいデザインとなっていること。また、事務棟の地域交流室の計画では、日常のカジュアルな空間とは異なるフォーマルで秩序あるデザインによる空間が提供されていることで、こどもたちが施設内に多様な居場所を発見できる構成になっていることなどが評価された。

以上のように、こどもたちが質の高い快適な建築空間と文化的景観により安心安全を確保しながら自分自身をとりもどす契機を提供できている点と、更に、全体計画が持つ、個室から、リビング・ダイニング、中庭、地域交流室、周辺地域へという緩やかな空間のヒエラルキーにより、こどもたちに対して、他のこどもたちや、地域社会との自然な交流誘発されやすい環境となっていることは、こども環境学会デザイン賞に推奨するレベルに近く、高く評価された。

しかしながら、これらの私から公への空間のヒエラルキーの中で、最も重要と思われる中庭空間のデザインにおいて、こどもたちがより積極的に自然環境との触れ合うことのできる仕掛けや、分散配置された棟に居住するこどもたち同士の遊びが誘発されやすい空間的配慮が更にあってもよかったのではないかという点、また、事務棟の空間構成においても、エントランス部分にオープンキッチンを含む誘導空間を設けるなどの丁寧な配慮がありその点は高い評価となったが、地域交流室自体の開口部計画においては、地域開放イベントなどを想定したより積極的な空間開放の仕掛けがオプションとしてあっても良かったのではないかという点等から、今回の最終的な審査結果としては、こども環境学会デザイン奨励賞に推奨するに相応しい優れたプロジェクトであると判断した。

(佐久間 治)

# 総評

こども環境活動賞

神谷 明宏  
活動賞 選考委員長

本年度の応募数は昨年最低を記録した倍の4件の応募があり喜ばしいことであった。しかし、残念なことに活動賞の受賞は1件のみであった。何度も委員会が申し上げているように、活動賞で一番重要視しているのは子ども参画の取り組みである。さらに継続性とさまざまな組織や人々との連携がある。残念ながら今回受賞を逃された方々の応募内容を拝見すると、委員の方々全員が、子どもたちが活動の準備段階から主体性を発揮して取り組める環境作りが十分に成され、結果として記録の中で生き生きとした子どもの姿が記録として残っているとは言い難いと評価しているのである。しかし、それだからといって皆さんの活動内容がすばらしくないと言っているのではないことも書き添えておきたい。特に子どものためにという熱い思いを持って、あるいは子どもと共にその当事者として取り組まれた活動には大いに拍手を送りたい。確かに、子ども参画の考え方や取り組みは日本の子ども活動では歴史的にみても未だに定着しているとは言い難い事実がある。だからこそ本学会ではそれを高く評価しているのである。一方で、どんなに創造性に富んだ継続性のある活動であっても、すでにいろいろな組織や団体が取り組み、普及活動段階に入ってしまった内容では評価のしようがないというのも事実である。ぜひ、活動賞活性化のため、従来の枠組みで捉えられない新しい試みになる創作作品や映像作品等々の新たなジャンルについても活動賞への応募を考えていただきたい。



## 活動賞

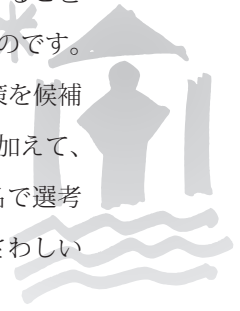
西本雅人（福井大学）、久保久志（株式会社東畑建築事務所）、  
江端雄也（株式会社鈴木一級建築士事務所）、宇野勇治（愛知産業大学）、松木憲司（蒼築舎株式会社）、  
辻 悟（株式会社工房ヤマセン辻佛壇）、辻 亮（株式会社工房ヤマセン辻佛壇）、新川森林組合、  
魚津市立星の杜小学校、魚津市教育委員会、福井大学西本研究室

### 木造校舎を使った木育カリキュラムの実践 「魚津市立星の杜小学校での取り組み」

2004年に文部科学省は「あたたかみとぬくもりのある 木の学校」を取りまとめて出版し、その後も木造の学校づくりを進めている。本活動は、単に木造の学校建築をつくることにとどまらず、建築前の計画段階から児童が参加型でワークショップを重ねながら、建築後も定期的な木板の塗装作業を児童自ら行うなどアクティブラーニング的な要素を取り入れながらすすめている。タイルアートや木パネルを子どもたちが作り、壁塗りのメンテナンスをして「自分たちの学校」を作っている。自分が作ったものを卒業時に持ち帰るのも思い出になり、また次の学年も活動を継続できる。子どもの発達段階に合わせて活動が組まれているので、無理なく子どもたちが自分らしさを発揮できる。自分で作ったものが使われていることの喜びや感動は大きい、と拝察できる素晴らしい活動である。また設計段階で現場の学校教員の意見が反映されるのは希有だが非常に重要なことで、子どもの安心安全な学校生活と効果的な教育には必要なことといえる。さらに行政・学校と一体となつての活動であり、地域の活性化に大いに貢献されている活動で、子どもたちが地元の産業や社会文化に関心をもち、地産地消の大切さが意識できる。これまで出会ったことのない職業人（しかも若い職人もいる）との出会いがあり、キャリアガイダンスとしても有効といえる。

一過性のイベントではなく、子どもたちと共に長期間（継続的）かけて「木」をめぐる参画型による学びの活動、地域やコミュニティ活性化への広がりや協働性など先駆的な取り組みとして高く評価された。  
（小澤 紀美子）





# 総評

## 子ども環境自治体施策賞

自治体施策賞  
選考委員長  
田川 正毅

「子ども環境自治体施策賞」は、行政による優良な子ども環境改善施策を顕彰することにより、その施策のさらなる発展と、他の自治体における施策の活発化も期するものです。会員から推薦された施策と、本学会の「子ども自治体委員会」から推薦された施策を候補とし、本審査委員会が選考する仕組みとなっています。今年度は8名の選考委員に加えて、柳田良造・岐阜市立女子短期大学名誉教授に外部審査委員をお願いして、計9名で選考委員会を構成しました。そして、会員からの推薦1件について、「奨励賞」にふさわしい施策として選定いたしました。

今回の取り組みは、幼児にとって身近な場所の工事説明会において、その利用主体として行政が園児に真摯に向き合っている継続的な行いで、その背景には市の子ども条例の理念が生かされています。自然環境等との関りだけではなく、環境への眼差しはこうした生活環境との向き合い方にも表れることを、この取り組みは教えてくれます。これらの工事説明会は市のホームページ等で広く発信され、他の行政施策においてもこどもの権利が尊重されるべきであることが伝わります。こども参画や総合的施策へのインパクトがやや見えづらいことから奨励賞に留まりましたが、意識醸成の面からも有意義な取り組みであり今後の拡がり期待されます。

### 自治体 施策賞

日進市長 近藤裕貴

## 子ども権利条例にもとづく園児向け工事説明会の取り組み —愛知県日進市の事例—

この度は子ども環境学会自治体施策賞奨励賞の受賞、誠にありがとうございます。

一般的に乳幼児期の子ども参画の視点の導入や働きかけの手法論は少なく、実践が難しいとされている中、本事業は公立保育園の改修についての理解の促進に向け、市の持つ子ども条例の理念等を具現化する手法のひとつとしてメインユーザーである幼児期の子どもの権利の観点から実施しようとしている点が先駆的であると評価されました。

2～4歳は排泄物への関心も高まる時期であり、「排泄はトイレです」とこの理解と関心を促すためにも「トイレ」という場は非常に重要な幼児教育の場にもなります。その点、この取組みはトイレ工事の説明以上に幼児たちに排泄物が流れゆく便器の仕組みや水が流れる様子の「見える化」など、幼児にとってトイレという重要な生活環境への意識化の働きかけを促し実現した事業と捉えることができます。また事業者は幼児期の子どもの意見の本質的な理解を促す効果と共に、公立保育園でモデル施策とすることで民間園への波及効果も期待できます。単純明快でありながらも大いに効果のある施策で、今後の拡がりへの期待が感じられたことから、奨励賞に値するとの結論に至りました。今後の展開に期待しています。

(三輪 律江)